

今までアジアの発展途上国を幾度となく訪問した。タクシーに乗ると、必ずと言ってよいほど小学生くらいの子供たちが信号待ちの車に両手を差し出し物ごいに来る。読者の皆さまにも同じようなことを経験された方がおありかもしれない。私がこのことを初めて経験したのはまだ自動車会社の社員であった二十代のころである。

路上においては危ないぞ、と思いつながら、かわいそうだからいくらかあげなければ…とスポンのポケットに手を突っ込む。そしてどうしようかと迷うのである。あげたときには何か割り切れない気持ちが残る。あげなかったときには、いくらかの後悔の念とともにその子供たちが差し出した小さな手を複雑な気持ちで思い出すのである。

後に国際協力の仕事でスリランカに行き、貧しい尼寺を訪問した。そこでは親に捨てられた身体障害児や、子に捨てられた

## 「小さな手」

AMD A 近藤 祐次  
事務局長

老人たちが生活していた。尼僧たちは約二十人の子供たちの一年間の食費の援助を求めていた。日本円にして合計七万円。それくらいなら私の小遣いからすぐ出そう、と思ったところ同行の同僚がつぶやいた。今その金で一年間食いつないでも次の年はどうなるのか。私は路上のあの子供たちの小さな手を思い出した。そして人々の自立には魚をあげるよりは魚の取り方を教えることが重要であることを思い知った。結局現金を手渡さず、尼僧には自立のための事業実施を提案した。

人々の真の自立を目指すには根気よく共同で活動を行う必要がある。「どれだけ真剣に私たちのことを考えてくれますか」。そう言っって路上の子供たちの「小さな手」は、安易な支援をしようとする私たちの態度を試しているような気がしてならない。

一 日 一 題